

「2019年4月17日リリースのリマスター盤について

～井筒香奈江ってこんな歌手だったんだ」

鈴木 裕

『時のまにまに』シリーズの初期の4作がリマスター盤としてリリースされた（ただし、IとIIが1タイトルにまとめられているので、全部で3タイトル）。そのリマスタリングの作業や音質について、筆者が担当させてもらっているミュージックバードの番組に井筒香奈江さんに来てもらって事情を伺っていった。その音質についてスタジオでも比較したが、自宅であらためて聞きなおした。その結果をまとめておきたい。

そもそも今回のリマスターのきっかけは旧盤の在庫が尽きてきたからだという。最近のアルバムを聴いて気に入った人が、かつての旧譜を購入する例も少なくない。そこで新たにCDを作るのにあたって音質的にもさらに向上させたかったというのが主な動機。ちなみにマスターは96kHz/24bitで録音されたデジタルデータ（音楽ファイル）だ。

一般的にリマスタリングというと、f特をいじったり、コンプレッサーなどをかけて音圧を上げるというイメージがあるが今回はそういったことを一切やっていない。デジタル領域で「情報を補完する技術」を投入するというタイプのリマスタリングなのだ。

具体的に書くと、まず“eilex HD Remaster”技術を使って192kHz/32bitにアップサンプリング。そのデータから44.1kHz/16bitのCDマスターを制作している。一旦アップサンプリングを行うことで、そのままCDマスターを作るよりも音質的に有利だという。そのアイデアは、アルバム『リンデンバウムより』でエンジニアを務めた篠田健二さんによるものだ。

また、こうした作業の過程では、実際に音を確認しながらいくつかのパラメーターの設定をしていくそうだが、その人間の耳が関与する部分については『リンデンバウムより』でプロデューサーも担当した堀部公史氏が実際の作業を行なっている。

ということで、問題の核心は“eilex HD Remaster”でやっていることになってくる。詳しくはアイレックスのウェブサイトを参照していただきたいが簡単にまとめておこう。

<http://eilex.jp/licensing/eilex-hd-remaster/>

今回は、96kHz/24bitから192kHz/32bitにアップサンプリングしているのだが、「オーディオ信号から複数回高調波発生器で超高域の高調波を作り、ソースの上限周波数で正確に繋ぎ、高域を理論的上限まで延ばし」しているという。

もうひとつの特徴は、bit深度を24から32と、8bit上げている点だが、これについては「多ビット化で新たに設けられたスペースには、ノイズではなく意味のある信号を入れて行きます。(中略)音のディテール、あたたかみ、やわらかさ、ニュアンス等を効果

的に再現」できる、という。

もうちょっと短くまとめると「独自のアルゴリズムで、より自然界の音に近い減衰を再現する技術」。そういう内容。補完、という言葉を使ってもいいだろう。その 192kHz/32bit にした音楽ファイルを、デジタル領域で 44.1kHz/16bit ヘダウンコンバートしたことになる。

さらにそうしてリマスタリングした CD マスターを、UHQ-CD にしたのも大きい。素材と作り方の両方で工夫のある CD だ。特に高域のリニアリティは歴然と高い。念の為、普通の CD プレーヤーで再生できる。詳しくは <https://hqcd.jp/about/>

さて、その音について具体的にレポートしてみよう。スタジオでも井筒香奈江さんといっしょに聴いたが、あらためてうちのシステムで厳密に比較してみた。

まず、『時のまにまに』(いわゆる I)から「悲しくてやりきれない」。

オリジナル(従来の CD 盤)と今回のリマスタリング盤を比較してみよう。

差は小さいと言えれば小さいし、大きいと言えれば大きい。というのも、オーディオの音を音色感で聴く人にとっては、差が小さいからだ。たとえば、暖かいトーンとか、高域がま

ろやかとか、低域の押し出しがいいといった変化を求める人にはその差はわずか。しかし、音像の大きさやフォーカスの精度、音の立ち上がり時の情報量、音像の表面の質感とかニュアンスといったものをより深く把握したい人にとっては音の違いは小さくない。リマスター盤の方がずいぶん良くなっている。

まず、アコギのイントロは若干奥に定位。指で弦をハジく、その一音一音の動きが見えるようだ。抑揚がよくついているというか、指と弦が触れてからエネルギーが溜まって弾かれる。そのひとつひとつの動きに差があることが見事に見えてくる。

歌がまた興味深い。オリジナルでは何か呆然としているというか、感情はあるのだがその動きが止まってしまっているように感じるのに対し、リマスター盤では歌っている歌詞ひとつひとつに反応して感情に起伏が発生しているのが伝わってくる。心が潤っていると云ったらいいだろうか。音というよりも音楽が潤っているのだ。音楽の中に流れている時間がよりゆったりと流れているようにも感じる。念のため、テンポが遅くなっているわけではなく、ゆったりと流れる時の流れが心地よい。ニュアンスとしてはずいぶん多彩に、豊かになっている。

『時のまにまに III ～ひこうき雲～』。このアルバムでの違いもかなり大きい。ここから「ひこうき雲」を聴いてみる。

そもそも以前から思っていたのだがオリジナル盤で聴くと、まず音程が微妙にだがフラットしているように聞えるし、さらに言ってしまうとこの歌手の人、血色の悪い、暗い人なんだろうな、という歌なのだ。念の為に、血色が悪くても暗くても人として劣っているとか、魅力がないということではない。そういう芸風の歌手として好きなファンがいるのもよく知っている。なにしろ、いろいろ辛い人生を送ってきたんだろうなと想像していた。これがリマスター盤で聴くと、ピアノはより鳴りのいい楽器で、特に低音は豪華な感じがあるし、エコー成分も良質で長く響いている。歌の音程はフラットしていないし、歌っている表情として微笑んでいるようにさえ感じられる部分もある。もちろん天真爛漫に明るいわけじゃないが、人生に対して恨んだり、悲観していない。声も潤っている。

実は井筒香奈江さんと実際に会って感じていたのは、初期のアルバムを作った頃は何か辛いことがあって悩んでいたんだろうなと。最近では歌手活動としても調子よく、気持ちも明るくなったのだろうと勝手に推測していたが、実際はそこまでは落ち込んでいなかったのだ。今回のリマスター盤がそういう方向に音作りをしたんじゃないのは、レコード盤で聴いた時の感覚と共通しているので、そもそもこういう音のアルバムだし、そういう人生の段階で作られた音楽だったということがわかる。

音楽の演奏を録音し、それを再生すること。その面白さと怖さを感じさせる今回のリマスターリングだ。少なくとも”時のまにまに”シリーズの4までは、ほんとはこんな歌手で、
こういう音楽をやっていた。そんなことがわかってしまうリマスター盤。

きちんと再生すればするほど、鈴木裕がおおげさなことを言っているのではないことに
同意してもらえらると思う。